

徒然なるままに…36

— よりよい授業づくりのために —



平成27年8月7日
白鳥小学校 研修部

暑い日々が続いています。毎年思うとは言え、今年の夏の暑さは、ちょっと違う感じがしませんか。いよいよ、日本も熱帯化しているのでしょうか。先生方、くれぐれもご自愛ください。

私は、それ以上に、研究紀要の執筆・編集に熱くなっています。こうなることは、分かっていたのですが、事前にできなかった事情があった上に、私の個人的な原稿とも重なってしまい、綱渡りのような日々を過ごしています。



先生方にも、指導案づくりにご苦勞をお掛けしています。「できた～」、「やった～」という歓声をみんなで喜び合う場面に、先生方が手を取り合って授業づくりされていることを感じています。授業者には、指導案を通して、授業者側の意図と具体的な仕掛けを参会者に伝える説明責任があると思います。それが参観していただく者の心遣いであり、こちらの思いをしっかりと理解した上で授業と子どもの学びを検討していただいてこそ、意義があると考えます。先生方のご理解とご協力に、感謝しています。

さて、今回は、先般行った校内全体研修会の、⑧を振り返り、これからの授業づくりについて一考したことをお話ししたいと思います。

1点目は、目的と内容を明確に持つことです。これまで、本校では、「挑戦」をテーマに、取り上げたい教材を取り上げ、したい授業をづくることを大切にしてきました。しかし、したいだけでは、値打ちある授業にはなりません。教材から意義ある内容を見出し、それを意識しながら、授業として具現化することが必要だと考えられます。つまり、扱う内容を根拠に、この教材を取り上げるメリットを踏まえ、それが達成されるように授業を組み立てていくことが必要だということです。

社会科の場合は、社会事象である教材を通して、どういう社会の有り様や人々の姿を見せるのか、どんな社会を展望できるのかを明確に持つということになります。ここで問われるのが、それが正しい社会認識によるものかどうかです。一方的な見方考え方や思い(思想)ではなく、正確な資料の読み取りと社会事象や事実の解釈に基づいて、より



客観的で、科学的で、説得性のある社会認識を教師側が持っておくことが必要だと考えられます。そのよりどころは、社会諸科学の成果(木村先生がよくおっしゃる「〇〇学的な見方考え方」でとらえること)や文献・文献の記述などです。ここでは、教師の社会人としての見識が問われます。だからこそ、教師は、学び続ける人であり続けなければならないのでしょう。

2点目は、子どもの目線での単元構成・授業づくりをすることです。授業，学びの主体者は、子どもです。とすると、私たち授業者の役割は、その「支援」をすることではないでしょうか。「支援」とは、「させる」のではなく、「できるようにする」ことです。教師側の都合で決めたり、失敗しないように先手を打ちすぎたりすると、子どもの思いや願いが尊重されません。そのため、子どもは、教師のしたいことをやらされてしまったり、教師に先回りされて、思考や判断をするチャンスを奪われたりすることになると考えられます。見方考え方を示したり、活動を進めるノウハウを教えたりして、子どものしたい、考えたいことが展開できるようにすることが必要だと思います。



また、単元・授業展開を「形式」としてとらえてはいませんか。「この単元は、普通、こういう活動で組み立てる。」とか、「この授業の後には、この活動をするから。」などと、教師の意図に反して授業を組み立ててしまうことがあります。そうなると、無駄に時間を費やすことになったり、子どもの思考や学びに沿わない活動になってしまうことが考えられます。この授業でどんなことをねらうのか、そのために、どんな活動が必要なのかを考え、精選することが必要だと思います。

3点目は、言葉にこだわることです。その一つは、用いる「用語」にこだわることです。その言葉がどういう意味を持っているのか、どういう使われ方やとらえ方をするかを精査したり、似た意味の言葉と比べたりすることによって、その言葉の概念を明確にすることが必要だと考えられます。

二つ目は、「人の言葉」にこだわることです。携わる人々や体験した人々の話から象徴的な言葉を取り出し、その人がその言葉を用いた意味を考えることによって、思いや願い、意図に迫り、共感することができると考えられます。

三つ目は、「子どもの認識の伴った」用語を使うことです。とかく、子どもは、授業で教えられた、いわゆる「きれいな言葉」を使おうとします。しかし、その子なりにその言葉を意味付けることなく使ってしまうと、言葉だけが独り歩きしてしまうことになります。事象をつながりや意味から認識して、概念づくりができるようにすることが必要だと考えられます。



4点目は、授業を仕組むことです。どうすれば問いに至るか、ねらいに即して、どこをどのように考えさせるか、考える際に、どんな事実(資料)が必要か、さらに、どう問うて認識を深めるかというように、子どもの思考を想定し、手立てを考えることが必要だと考えられます。闇雲に考えるよう促すと、1答ずつ別々に授業が展開され、学習や子どもの認識に広がりや深まりが出なかったり、授業者側に探究して行きつく結論(=内容)がないまま授業を展開すると、さも、活発に思考したかのように思えるだけの授業になったりして、いわば、「はいまわる思考・授業」に陥ってしまうと考えられるのです。

地道に練り上げてきた指導案ができ上がりました。これから、10月30日の×デーに向けて、具体的な準備の段階に入ります。そこで、ぜひ、していただけたらと思うことを二つ挙げておこうと思います。

一つ目は、細かく授業をシミュレートすることです。提示する資料の内容やタイミング、メイン・サブの発問などとそれに対応する子どもの反応をできる限り綿密に想定して、どういう状況にも対処して、期待する認識へと子どもを落とす作戦を立てておくことが必要です。子どもも教師側も、おそらく、平常心ではないはずですから。

もう一つは、子どもを育てておくことです。資料活用や思考する能力、発言とそのつなげ方などといった子どもの「授業力」は、短時間に付くものではありません。また、当日、期待するように、子どもの思考や認識が高まるよう、少しずつ学習内容を積み上げ、子どもの認識をつくっておくことも必要でしょう。

まだ、三か月余りあります。まだまだ、これからです。あきらめず、安住せず、「挑戦」的に取り組んでいきましょう。よろしく願いいたします。

